朝夷巡嶋記 第六編 五

113
939
N30

門 イ 13
函 39
巻 016

東都　曲亭主人編輯

月花房仙史蔵書印

後輯第五十七

節義の守戸浦　損益の元鳥塚

光仲の夢物がたり人々駭き且感じる。そゞ中ふ義邦ハ且見姫の送せ一歌を。
ゝり返ーさうも唯ーて後悔嗟嘆ふ勝ざりけん光仲ふうも對ひて絆のそゞめを
推せと紀ハ某ゞ愁ふ藁二郎を八田の荘へ遣ーさりける故あり紀。ふーふき
ゐもーつるゑとふを光仲ゞ云へもいつぞゝハさることあゝんふ袋坂の窮泥ふも
交遊の義を忘れあハで彼男をゝて守直ふゞ資とせゝれ一まゝあ紀親切
他人の及ゞ所ふあゝ紀ふ慮ひ足らぬーて。そゞ妻ふ頭髻を剪らせ刺
忠信節義の藁二郎校枝ふせ非命ふ殺せ一錯誤ハみゐ某ゞ方寸ハ。

惑ひより出こうとい久も面を見さまを守直もさぞ恨みけん。あくまで高吉
等ぶあも久程も影護ーとの小人食慰め難く齊一嘆息をこりける登時
義秀隙を進めて藏人さの〻歎死のあり四時を行ふ天地も寒暑不順の
差舛あり。聖賢も亦然あり。誰ろ怨みあらんそを改ふまもなし。
婦人ハ胷の廣く〻ねど冤屈の怨よ身を措くひて早くく頭髻を
剪られーかども尚祝髪ふ及ばハ相計ふ術もあくうぎやハそこの女
某ふ。ちち任ーめへ〻抑且見姫の一條ハ前日小壺の浦邊ゆく某
これを咎てれども告るよ暇あり〻ふ和殿の夢想ハいよく奇やーて
且精細あるよーを始りゴ咎るハ箇様々々と浦太郎ゴ支の趣
首より尾りまで言送もあく說示せば光仲義邦ゴ〻ハ〻〻高利
廣光高吉ふ城戸水草馬養の青年輩まで皆〻兄弟夫婦

一對の彼誠心を感じる。次の間よさへ人ありてよとおりふ泣沈む老女の
声ぞ咎えける。當下義邦ハ廣光ふそ〻くく彼蒙二郎ふ異父の兄
あるよーハ小袋坂の危窟の折ふ咎ーなとその嫂と共侶よ黄泉の客とかゝん
とハつゆ〻ゆ〻ひぐ〻ひぐ〻紀然ばそ死ーるるゆハ惜ゆど返るべくもあぬを幸ひ中て
かの兄ある。浦太郎と称ふ。朝夷ぬーふ値偶せーハこも亦一奇支ゆゆ。
とハへバ廣光さンハ浦太郎ハその宵より御館ふをるよーかれバ朝夷ぬふ
請まうさん御對面あれ〻とふを義秀側よりそハふをまでもあ〻ん件の
男を諸君子の見參ふ入れんとて。召のほー置るとのひく外面ふ出
て浦太郎ハ那里ゆをる。近く進めと呼立れバ緣頰の畫処ある。貴戸の
蔭より忘る声隱らせー。浦太郎ハ光仲の夢物〻〻を洩ぞーより胸塞
まそ。たのもるる流の雨の袖ふ漏てもあ〻ふ憂ふ漏れぬ葛かゝ〻かくる

圍坐の席の末ふ數あるぬ身のゆゑりあく列ふ現一樹の蔭他生の縁と縁
類ふ進るも入らぬ額つけば義秀うもうんく浦太郎是首あり彼首へ遐ゝ〳〵ぬば
諸君子のいれーるも夏田氏の靈夢のゆもゆくゆえるあんあを葛二郎ぐ
故主ある吉見殿ぞあの方さぬハ桜枝ぐ主ある夏田殿ありとひとりくふ告あもれば
義邦やまう進ありてやよ浦太郎欲もどめてあひぬ幾遍いそも返らぬをいふハ
無益ふ似くれども死して灵ある葛二郎桜枝ぐ忠義ハ今世ふ感まるまあり
ありそれも劣らぬ故ぐ誠心貴賤その差ありといふとも親の心をもひ汲て弟ふ
家を嗣せんぬふ逐電せーふ呉の太伯の志ふ似ゝりとのハ事只この一ト條のみ
あ心。婦翁の怨を復さん為ふ飽ぬ夫婦の別れをーつ。活業をもんくゝぐ。
夏年心を竭せと欲天感空ーうゝねぐそ。朝夷ぬーふ値遇せーあり。獲ぐ死
両隻の鰐を刺ふ。みゆ同日の美談あれ是をあひ彼をもバ葛二郎ふ

あふ心地ぞ仕る本意の愜ひー對面あり紀とのあふ高利廣光高吉みが進ふ出
名告をーふ只管誉て已ざりるを且くと浦太郎ハ頭つ紀る頭を擡過世あり
てゆこの年来ふん愛顧を稟なりー葛二郎が兄ありとて大人君子の恭く
ふん目をあるのゝをそいと懇ふ感めあふを幸ひとゆゆゆくべき又幸ゆーとや
ゆ〳〵紀ふの歓びふ就て亦ふ哀ふも一ト〳〵まぬをハ葛二郎桜枝ぐ身後の
忠義の彼首ふも洩ぜえれぐそいと愚ある心ゆてはりく必ひへば天約貴紀こ
戦ぬ心夫婦の情義ハ不易ふ。と始あり終あり。ゆー始あり終あくハふ不良
善の君子こふとゆ徳ふ嗣る所ありと憚ある事ハ葛の平姿太田の
飛の。ふん疑の解せゆ。ふゆゆゆゆ姫ゆ人を召久させゆ人ぬるとゆ紀ハ主従ぐ
今生後世の雲霧ゆく天津月日をゆるゆーあり只願ーゆ紀ふこのみをこいふて
俟さーぐゆる誠ハふとゆくあれゆ光仲これをゆもゆゆく弟を易ふ勝推向

浦太郎あるへ進められてぞ蔵人光仲なれ嚮に名告をもべうりしぞ。のゝしれざりしハ汝が為に殉へ差る故ぞかし。かゝるに心の誠を演ていふれし趣意に称へり。光仲も亦木石ならねバ越に夫婦の再会を欲せざるにハあらねども。この事光難義あり。且見ハ早くまで頭髪を剪ぬ。召ぶとも輙く帰るべくぞあらぬ。いへバ光仲が身の非を飾るに似たれども。彼飯酢の一條ハ某に隷られたる。守戸それよく知られと。おもひて後方をそんじたるぞ義秀にぞよくあるいたく守戸の為る。とぞ明立れバこの程より紙門のあなたに泣沈たる守戸の局ハ忘ずしに涙を拭きて。かぞるへ進を入るぞ。義秀義邦粋を被て互に間近く待せたり。登時守戸ハ眼包に残る。涙を袖に拭へども。要時頭を擡げもやう座くやて光仲義秀義邦等に対ひていふやう。曩にハ桜枝が縁しに連て。武蔵より寄せあひぬる。姫うへのおん消息をみそかに取継せしそのすゑ忽地冤となる情由ハ先より殿さまのおん物かくりに驚きたりぬ。おそ諍言に似たれども。かの折武蔵の姫うへより贈らせたまひし磁器に異ありとしも絶て得知らね。その詰足え座に一隻の鳥の死したるぞ。うんづおそろもはつぱりぞ今ちゝるバ太田の殿のおん物にふ吻合して毛骨も竦たり。おもがれハ殿のおん疑ひも寔に然るべき事にぞありしそ。その慝ハ矩を踰掟を犯して姫うへのおん消息を取継たまへる事からうへのおん待るうし。おもこされすと御灵夢の事云云と姫うへに具に告させたまへバ鶴駿をぞ前らせたまふとも軀く帰らせたまへぞやかとのひて後方をそんぞいりて南浦さとのごふまぐる桜枝が自殺おぞく対面ハせざりしかども。姫うへのおん濡衣も乾きまし。おん身の舎弟蒙二どのく忠魂義膽識りせざりしふして。姫うへのおん齢四十に及ぶまで子のあらざるハ。女児とも思ひし姪を先だてゝる悲しさか。胥にもあらざれ。おん身ハ舎弟に立代りて桜枝にありつゝく姫うへ

御夫婦再會のおん使ごもせばりせば草の原なる故人ふ在ふ八幡と云
さんおん身八何と云ぶぞと問れて勇む浦太郎八頃ふ勝の進むを覚ぜそ々
其も願ふ今し君をそへ八身をそ。この議八よく〳〵成就せば弟と妻八千僧の
讀経ふ優く佛果を祈んあるべし郎君吉見の殿ぞ。弟を添させ給ひて
彼姫こへの帰ふ心をみ。おん相討をあくまほしく乞御慈悲々々と彼此へ願
つく姪夫妻の嬰切あり願ひ深し海の名ふ守戸の浦ゆ船渡りする歎ふ云
人欲道理ふ逼られく感涙の外ふ中ふ義秀八勝ちし祝ひ声高ふ
通微妙ふ願ひあり。これも亦件のすを笑ふ日ふ藏人夫婦の為ふ肝膽を
摧くもの。この議輙く整ひぬ。情由八只今夏田生のいれし如八歎美あり
且見姫八ふくあり尼ふなるべ。情願あり。を駿河前司の許さ。て藏人ふ
妻せ。りと偽ふ。を呼合し今その意中を推量ふ藁二郎ふ灸ぶ

枕ふ立夢ふ入りて。寃屈のよを諦せ。良人の疑ひ解ぶと報ぶを。歎ふ
べし然とて頭髪を剪ふ。ふ阿容々として帰ふ前非を悔て双ふ代る。
藁二梭杖ふ身後の義列を偽へ。ふ渠をも憐むあり弥増て出家の願ひ
決定せ。又藏人も如右そう〳〵人の為ふ謀られ身れ恢を知ることをも男女尊
卑の差別あり今をこ。を揚り腰を折めく賠詰ふ妻ふ帰れといふ冠と憂と
処を易く倒ふ懸るふ如〳〵首鼠両端ふ決めくしてもて煩ふこの故ふ。
汝達ふ弟と姪ふ代らんと願ふ則ふ。の誠産霊も感應あり。ふ不測の功を立
めせ。これ。この義を父ふ請ふく守戸ふ身の暇を取せん浦太郎ゆ共ふ伍
豆の愛玉ふ走ふくよ。を告て姫ふ仕へよ藏人もこの便りふ就く言告やらる、
よ。もあ〳〵。ぶめいで出家を祭め折を窺ひ時宜ふよりく叔藁二郎
梭杖ふ灸の寃屈を諦せ〳〵夏の趣藏人も亦後悔の言云云と報知せて間中

隼人と相謀りその間に且見姫の恋ひ屈る心の迷ひも頭髻も伸く書ゆや成らんとくせよと説示せば浦太郎は守戸と共に一議に及ばずまづく勇こく御教諭うけたまはりぬ明暁発足仕らんとのみ歓び下河辺高吉も赤進さく朝夷大人の宏計ひは一言隻句も皆千金のごとく感服仕りぬ就て守戸浦太郎ぶは桜枝蒙二郎が兄とのみも姫うく認りあるひべ疑ふこともあるべし某も亦共倍に彼地に赴くべきあるべしの使りとく

てそのいめといへば高利義邦主従その浅寔ふ為べし藏人如しへのぶこゆ

と問れて光仲貌を改め不肖の某かくまでふ諸君の群議を労まることあれ莫大の幸ひこいなぞう推辞必ず且見姫はもう妻おろう駿河前司の愛女ゆえ鎌倉殿の宗族なり某は素刑餘の賤隷婦翁に代りて征東の大任をめめといへども一炊の栄華ゆく今は浮浪の窮士なり且見姫

些の恵ありとも前司殿の恩義をあらぐ去らるべ妻ゆあるべ況く那時飯酢の縡の真偽を考糾さで怒りく歌を贈りしは短慮ふ甚く今更ふ後悔を噬の外ゆ然るを僅ふ歓ぶべ妃は曩に桜枝蒙二郎が忠告の霊魂あり今は守戸と浦太郎が使を望む媒妁ありかくいへばとく光仲が色に愛情に惹れく妻に逢んと楽みあるべきふ妹伏の縁しを結んとも又結ぶとも太田は且見が荘園あり彼處ふ入て後見せばいれあれば世を捨て往方もあるせもあり前司殿の恩義に負くるが悲はあるあり小三郎もこの意を汲く守戸浦太が案内をせよ伊豆へ遣を物こそあれとのみく短刀引抜く頭髻を弗と剪とりつゆを収めて更ふ又墨を斗の筆を接半ばく且見姫の袱の裏ふ まづつこのあ名をうる濡衣はあまとるべ祥ぞありけると書れる件の歌に推並べく 後の世をかけくむをびー

黒髪の柔れのそゑをうれやとうまし。書とゞめ讀ゝへて両隻の頭髪を推包む袱の端をもてゝ結びて いざとて守戸浦太郎うゐとりふゝ
よ汝れがあをもゝふとたゝりふ人貪駭嘆せざるもなく呆れく目と目を指ゝるのゝあと向ゝべくもあゝぞるを義秀ひとり些も驚ゞ左右をつゝく
えゝうゝく諸君子何とうゝんあひゝ夫婦の離別ふ世をそゝろゝく髪を前る藏人かゝんや先よくこの意を猜しゝへといはれて驚く光仲ハふ招れて
推禁め朝夷めゝの賢察いこの席の外漏をべゝゝゝ某既ふ世ふ捨られて
憖命のあゝん限りハ横難を怕るのゝかれば浮世ふ望なゝ
示ゝ薙髪の體い嫌忌を避ん為ふゝて村ゝ且見を誣ゝうゝその怨をゝも
慰る報ひをちふ包ゝうゝ曩ふ廷尉ふ義盛を預けまゝりゝ弓箭を取よせ
めひゝとのふ義秀嘗鳴しゝて童扈徒を招よせ綽云云と分付れゝあゝ

汝果ゝく退出つ。且くしゝて来る弓箭を光仲ゝを受とうち戴ゝく
左右ふつゝ立下何違小三郎近く進ゝて兼まあれい光家の車宝雷上動
透羽彫羽の弓箭ゝ頼政卿より相兼ゝて仲綱ゝれを駿河守廣綱ゝ伝へ
ゝ余るふ経任征伐の折不肖の某借用ゝて國賊を討夷げゝも皆この弓
箭ハ德すゝく霊応灼然ゝうゝハ世の人もよゝく知まり光仲既ふ黙られく
道へゝかゝゝるふ曲置くべゝ
ゝゝゝ呂竜ゝゝゝその日より廷尉ふ預措ゝゝ仲綱の女子許多あり
嬬男肥後守宗綱めゝハ治兼四年の戦ひふ屯道ゆゝく自殺ゝめゝ二男
左衛門尉有綱めゝハ治兼四年六月十九日伊賀國名張ふく平時定ふ
撃れゝゝゝ三男田代冠者頼成ハ今ゝ鎌倉ふ在りといへども栄利の為ふ
恥をゝゝ傾城局の別當を奉ゝゝゝゝれば頼げゝゝ四男廷尉成綱ハ

間中隼人
朝ひる
浦太郎
光仲
十郎左衛門
己主後と
再會の
二人

既ふる世を逝あひぬ五男ハ廣綱朝臣ゆく實ハ仲綱の養嗣ゝ寓
判官代頼季も近属物故のさえあり きて〳〵のうへハ高吉も豫てよりよく
知りつゝんぬとう伊豆守公綱ぬしハ宗綱のあん子ゆく仲綱朝臣の嫡男う
弓箭を取て父祖ふ劣らぢ大内の守護とゝく年来在京ちゆへ〳〵これこの弓
箭を公綱ぬしふ讓らんとあるゆゑ和殿伊豆ふ走ゆく且見姫ゆもこれらのうを
告ゝく華洛ふ走登り公綱ぬしふ倣へよう彼人ゆゑ後の住ひを甚麽と
問れかば ゑひ入る深山の牡鹿支ゑん弓箭を捨〳〵身ゑそゆけまと
ぞうゑふそゑへと答へより〳〵と叮嚀ふ示〳〵弓箭を遠与ゆふん高吉ハその
ゑの理りあれば推辞ゝ応ゝてぞ畏るこれを見彼をゑひぞむ義邦主後
高利ふ守戸浦太郎の傳あぞ刃ふ恐ゝくと水枯の杜あくなくふ慰る言の
葉もあく深ゆ夜の席上ゆとぐ蕭介之光仲左右をえゝへりて喃諸君子

かうゆゑ愛惜の述懐み似られどもむゝゝ外ふ聞せ〳〵書の彼邯鄲の黍
一炊も見べ今のこゝろうゑあり除目補任の目覚〳〵ゆ把安南柯の一夢ふ過ぞ
かゑもべけふあり道歸を枕中齋とゆべゆのゑをうゑゆやとうも笑へば
義秀も亦含笑ゝく光仲入道枕中齋こゑ相応〳〵佳歸ゑゆ彼沈氏
既濟をゑゑ世ふ在〳〵ゆべ壁署を書ん枕とゆべ既ふゑゆ寐よとの鐘も
響くゑ浦太郎守戸ふいとく退ゆく起行の准備をせぞゆゑとゆそうけべ
高吉も亦共倡ふとく齊一立んとゆる程ふ次の間ふ人ありゝくゆよ漢ゆへ
と呼禁めゝく猛ふ進ゑ入るゆめをとゑれべ是別人あゝぞ間中華人寺直
ありゆひうけゆゑすゆればありゝくゆふ。とぞうりふ衆皆驚ゆ且怪ゑゑ只
つゝくとうち目成ゑゆ守直さゑそと含笑ゝく先義秀ゆ仕官を寿ゆ義邦
高利光仲ゆ蟄居免許のよゝを祝ゝく又光仲ふ對ひゑゆゆ此度某當所よ

きまつるを縁にも知せまゐらせべさを訪ひくべられん先何よりうまらにべ妃へぬる月の
阨難ゐ援技蒙二郎ゆ灵魂の資ゐ捕らるを飛脱け和とり姫うへゐ倶し
生りく伊豆を志く走る折うゝ彼おん頭髪を包せゐひし祇物ハ苦六ゐ受くも
奪略りくるを怒地虚空ゐ吹升されく往方もあゝ泥かりしゐその霄再度れ
大奇事ゆく吉凶料をかくりしゐこれゆもおしく怪しゐ剪せゐひし姫うへの
御髪ハその夜次の夜と夜毎々ゐ延ると或ハ四五寸七八寸既ゆしく愛玉なる
藍玉院へ著ゐ日ハ御髪ゐ弥倍さく地を引ゐふまゐゐかりくりあゐ
未曾有の珍変ゐれば某諫まりて祝髪得度のゆ一及びも舊の俗ゐく
をハませしゐ昨夕ゆうゐく援技蒙二郎う尋来て夏田殿言見佐味の殿
ゐうゝ明後日ハ赦免の慶ひあゝんとく鎌倉へ赴妃迎ゐ遅々せば後悔あるべし。と
報るとゆべ夢覚うり天明ゐ後ゐこのすを姫うへゐ告まゝせば姫うへ驚妃且

欲びくまゝいゐ昨宵ゆうる夢もゐゐこの夢と一点違ハをゐゐ正夢である
べ妃ゐく鎌倉へ赴妃く絆の虚実をあくせまゐと宣ゆるゐ憑しくて役院ゐる
文僧達ゐ姫うへを委任くゐ獨濱邊ゐ赴妃く便船を索る程ゐ石積し船の
鎌倉へとて纜を釋くと雲えしゐ便求めて港成も下田の浦を発出せしゐけゐ
暁のすりしゐ折うゝ順風ありければ三十餘里の海上を只一日ゐ乗著ゐく旦巷
談を拐ゆくゐ主君并ゐ殿ゐうの恩免の沙汰夢想ゐ違ゐ朝夷大人の柳
営へ徴れゆしうゐ人ゐまべく定うゐゆえしゐ海月の骨ゐあゐ心地して勇ゆ
足も進泳隨ゐこの御館へ推参せしゐ黄昏時のすりゆ妃かて七殿義嘉若殿
常盛をゐ見ゐしく由を述しゐ大殿の宣ゐ安う義秀い夏田吉見佐味の人々と囲半して
如此さゐの座敷ゐをり今酒醴の最中ゐしゐんゐとくく彼処へあゐれとて童子色従を
隷られうかくゐこの次の間まで来る程ゐ諸大人の物ゐくゐひのを蕭やうゐえし

○とゝて言果て後ホ上て見参ホ入らるゝと云く案内の童を退けて ひとり建屏の
蔭ヨ坐を占てやゝ時を移を程ホ曩ヨ主君の霊夢のゆ併ホ浮戸浦太郎
ホゞ素生も又その心操も朦朧ありて浅ぞう又只渠ホのう人のこゝゆ主君の
後悔弓箭のすゝん警を前ホ折ヨ至るいよく駭嘆禁めもゝんとゝく
立あくもゝホ及ばべくもあゝぎれば淺れ胷を推居て猶も彼首ホゆひゝホ厳の
頭髪を剪あひゝホ別ホ賢慮のあるよゝゆく只一ホ姫うへヨ贈らるあゝ故
のこゝ心を洩ゝてよりそ安心今ハかうとゝふをり朝夷大人の云云と
守戸浦太郎ホあろ始さゝて小三郎共倍ヨ姫うへのおん為ホ愛王へとて起
行の准備を急ぎぜあゝホゝん姫うへの無為御髪のゝも今この折ヨ告まゝ
ゝぞハ怠慢の罪免れぐこゝと受ばが声をあり立て漫ホ呼禁めゆひゝまゝ曩ホ
桜枝蕚二郎ホゞ自殺の折の為体のひゝるよゝハ如此ゝゝ介後渠ホゞ霊魂

顕れ橋間苫六等を撃走らゝ光景ハ箇様々々と具ホ報て又いゝゆう。
ゝゝゝが如ハ浦太郎守戸も劣らぬ孝友節義ゝゝ始ゝ迄ゝ共ゝ只恥らゝを
縛の初ホ某慮ひ足らぬてゝん消息の究とゝりゝハ大ゝゝゝゝ怒ゝりゝハ
あれども漸ゝホ尼釋け禍退けゝかゝる園坐の席未ホゝり合せ一期の決ひ
喻ゝホ物も必ず乞併朝夷ぬ御橋梓の餘光あゝべ寔ホ愛ゝ愛
たゝと壽ハ勇む主従の再會ハ現頼ゝく耳新ゝ珍説家信ホ光仲頭を
傾けゝく感ゝく只顧嘆賞も況ゝく席ヨ在りと有ゝ友人主後推併ゝく誰ゝ感
嘆せざるべハ物ホ動せぬ義秀さへホ咲片向ゝく悦ヨ思ぞかゝひゝゝり産ヨ
易ゝとゝホ鄙語ホ似ゝるかゝ奇ゝくと稱へゝりそゝ中ホ光仲ハ又ハゝる心を額ホ
加ゝく肩ゝり考ハ息を吻ハ忠臣烈女の霊あるよゝハ和漢ホ先蹤多ゝれど
蕚二郎桜枝が霊魂捕ゝを矢庭ホ撃退けゝ又夢ヨ入り頭髪を掛け且見

明の建文の時燕王逆謀あり。その かく推言て まづ鬚延て 三尺あまり この事泰成 しれどもかは 県しての 鬚の延し こと一夕に しく長サ 三尺にも及び しとぞこれ ひのうへハ 天朝の建仁 より二百余 年後の事なれ ば光仲ハ ある人にて 聞ざりけん 由なきことを 恨ことを 差し

姫の寃屈のよしを許するぞ怪しき。こは姫が剪りたる髻の三四宿の程にして舊の
ごとくに延たるハ鬼神もよくしがたき所なれバ。現未曾有の奇特也。唐山にハ元祐年壽星
降りて道士となり酒を喫を日に一石。その頭の伸ることも一宿に長さ三尺に
及びしとぞ。世にいふ福禄壽星これ也。されども其ハ人倫の乱にあらぬ星の精の
なりけれバ。且見が例に援くべくもあらぬにて。貞女の寃を憐む神明仏陀の冥
助なり。狀然ながら三位入道頼政ハ己下父祖の神霊の祝髪を禁めたまひしあらん
ずらんと知らずして光仲ハ頭髪を剪らして嫌忌を避しも科なき妻を誣たり。
ける悪報とのみいふべきなれバ。損益得失寔にそのあたかも至らざる所の以ならぬを
知るに足れり。されバ後々も剪らせたる頭髪ハ且見姫に示して浅藍王院に相瘞て
髻塚とも呼做すハ。自他勧懲の端とならん。是光仲が願ひし髙吉ハ守戸浦太郎と
舟行を伊豆へ赴かしめられしより且見に報よ。守直ハ留りて曩ハ吾倩と共侶に

太田の荘へ立かへりて兵火に焼失たる家のうへその工作をいそぐべし。土木の功の終りなバ
且見姫を迎入れてかれハ諸國を遊歷して廣綱朝臣の在処を索ん。今更夫婦
再會の縁云云と世に知られなバ亦彼人に忌るべしと示せしを義秀うちきゝてその
議誠に肝要也。靈夢の事も且見姫の黒髪の猛に延たる奇に誇りて口走らバ。
そを禍を招くに做し。秘すとこそ抗じて諭せバ衆皆有理と応へて一口をも籍ざ
りける。かくて守直髙吉ハ自他主従の恙なかりし此の再會を逆に祝して別後の情を述る
程に。その言果て義邦ハ後方に侍りし武詮と昌之を見かへりて四郎太郎五二なる
者。進めといはれて義秀にうち對ひて朝夷ぬし。某今置土産に足下に送る物
あり。この武詮昌之ハ信夫荘司の舊臣なりける譜第なる。ぬし八足下も知りその
せらるゝが如し。今なほ某掃に寒郷の領主となりて家隷多く扶持せんとせんハ
身になかなかに相応しからず。それも亦彼らが[illegible]の疑ひを惹端ならんかなれバ、さらに身に

従ひ、のち廣光と継忠と両老黨ゐて事定れを願ひこの壮佞ゐを足下は附屬せ、ゆく欲をさせる要ゐ立ぜども駑馬ゐは優ぎとあゝん四郎太郎五この意を

ぜ。ゆく、ゆ、ゝも請まゐせよといふれく齊一額をつ紀御諚兼りゆゆ。某ゐは敗軍の残兵で、ゆゆしを曩ゐは多田殿ゐ従ゐ城を援紀賊を屠ゐ朝夷大人の庇ゐ立ゝゝは父兄の讐の首を獲ゝり。かれゞこの両君はその恩義主君ゐ等し。何ゐ仕ゐるとも合體同志の殿ゐ、ゝ、れゞ進退は時宜ゐ従ひ君ゐ隨意ゝゝ紀ゐの狄某ゐ今ゝりゝて朝夷大人ゐ仕へまゐりゝく犬馬の勞を盡ゝゞ君の為身の為ゐ報恩のよゝゞあり幸ひゐ、ゝゐとゝゐ義邦頼ゐく彼者共も右の如ゝゝゞ許容を祈るのゝとゝこのゐゞ義秀微咲く城戸は頗智君あり水草は亦勇士ゝ莊園一ケ所ゐ、ゝゞる某ゐ使れてゝ久後ゝのゝゞ紀と、ゝゝゐ在る花枝処ゐ在ゐ有用の折ゐ借ゐ、ゝん借れゐゐゞ紀中れゞ実意ゐ任せゝく預るべゝとゝゐゐ歎ぶ主従の商量早ゐ整ひゐ當下義秀父守直ゐゝ對へて其人をこの守戸を知るや渠は六浦のほとり移る郷士某甲が女兒ゐ漁夫浦平が妻の為ゐ妹ゝゝく孤とゝりゝゝそゝゐ仕へゝく二十餘年歳平ゐ及ぶゝゝゐは處女ゝと人はゝゝゐ和殿は内儀の七ゝより年来を歴ゝりとゝゝけゝれこの守戸城媒妁せん後妻ゝて共倍ゐ且見姫の護ゝれゐ両全の謀恩義ゝ一入まゐよゝゝあんとゝゐゐ光仲義邦もこの議宜ゐゝゝゝ現相応紀夫婦ゐゝとゝゝく守直ゐゝ驚紀ゐゝゝひゝゐ某齢半百ゐ近ゝ況く主従奔走ゝゐ安ゝゐ折ゐゐ老婆三昧何ゐせんこの議ゝゝゝゝ免ゝ免と推辞ゝ守戸も顔ゝゝ振ゝく夫ゐ流ゝく機を難人ゝり生涯奉公ゝゝれと受ゝ決ゝく偽ゐゐをゐん調ゝゐゝゐゝんと呟紀ゐゝく立んとゝゝを光仲急ゐ呼棄ゝく局よゝゐゝゐゝゝゝゝと朝夷妻のこれ彼ゐ媒妁せんとゝゝゝる事の情を精ゝゐ身後まゝ忠ゐゝ援技

なからぬ大功を賞するに由もなければその叔母に今この報ひをなさんなん守直は故三位頼政卿の勇臣なりし井隼太の後なれば良人と頼むに不足はなけれど されど婚姻は只今せまるにもあらず且見が太田へ帰りて後吉日を擇むべし隼人も亦よくこの意を得よ推辞はならぬ親ことなるべしと諭せば二人は内とさかりに文いひよりしもなかりけり且して義邦は廣光を見て又りとくこれは近日に石戸に遷ん汝は越路に赴きて判五一三靭繪の尼に営中の沙汰を報く浅良井と小三二を招く彼地より石戸へ来まといつれも廣光頭を傾け御説でははじめ下知なく食邑に就んまに標吉郎の主やて某従ひ奉らばよろづ不便ならんといふを義邦推へして否そのつまき障なし継忠の如き物足らぬは朝夷卿に武詮と昌之を借るも易かりその餘の雑人奴隷抔どは荏柄生に借用せばいくばくもぞ来つべし彼稲向は恩人且靭絵の尼も彼処にありかし人倚に告遣る事あると託に戴記し備足をえるそれ今事なければ香をしも焼きといへる世話に似て誰か浮薄とせざるべきとて退きて準備をせばやと辞せしを諭も折から隅兒越まで忽地進み入るものあり是則常盛なり義邦光仲にまうち對ひて義秀東道を仕れば数刻の酬席罪多かりし父義盛も甲夜の程見参に入るべかりしを老人の懶きに不敬を免しめへとなせる営侍なれどもかかる団居はまたくなりさし暁までも相譚しまへといふに衆皆進み向ひて大かたならぬ饗饌の歓びをかつ述まゐる言果て常盛は又義秀に對ひていかなる三郎家尊の仰ありその身武功あるにより鎌倉殿の御家臣に召加えらるるといへども稍父兄に寓居して荘園一所も賜らざりければ今より何をもて士を養ひ馬を飼ふべく君のおん大事に備ふべき抑相模國三浦郡矢部の荘は故右幕府のおん時に義盛が馬の飼料にとて御加恩の別荘なりこれを汝に譲るべしこの義を君に請まうさんは障もあるべうもあらざれば先にこの意を得させんことと云へよかしと

主人客に謝して退くを俗に中座という呉越の都賊と鄙野暴諸中酒而作らば中の意なるべし

宣ひたまいに義秀謹て言葉もなければ義邦主従光仲も共伴ふその歓びを述るもおん義秀に只苦笑して諸君子さのみ祝ひ給ふ君に仕へて君よ治ざりし荘園を親に授りかくても賞罰正しく人を用る世とぞ姑く中座を免へ父の臥房に赴たまふこの歓びをまつ〻く守戸が暇も乞まく弟ん下河邊が従者八獣六郎ま〻ろ〻ひさしく〻より奴隷をまわらべし浦太郎も退たく笠草鞋の准備せ〻守戸に後に跟たく来よ〻ひろけく遠しげに身を起せば守戸は後方に後堂へとく退く程に浦太郎は下河邊高吉とともに共に人々に別を告て立まくもれば黄光も獣六郎にあんとく三人齊一身旅起て縁頰よりぞ退たる是より後常盛は義秀に立代りて姑く衆客を管待を程に二郎義氏四郎義直五郎義重六郎義信七郎秀盛八郎義國に弟もかゝるに兄常盛と共に爵を勧る宴

垣山四鳥の別離に似る義邦も光仲も〻る国坐は異日復獲るかゝんと胃にのこるひも〻ぞ清談夜話に影も短たる水成月の晦に近たる玉兎盈れば鶴る聚雲のゆくもかへるも別路の天中も名残惜まるく檐端の松に風暢に袂涼したる後夜の鐘八ツ狭七ツ狭なる事たる交りなるく武士の時を後るる哀れ

後輯第五十八　天姒女の柱乞　勇敢人の貨獵

却説夏田蔵人光仲入道枕中齋は次の日義秀に辞別れ初ける間中隼人を引ぐく武蔵の太田へ赴くまで義秀則西三名の雑色奴隷を従へ彼主従の資に もろ〻この日亦下河邊小三郎高吉は守戸浦太郎共伴に義秀より隷られる 後者なるく首途に伊豆を投てぞ行たる かゝる程に佐味高利は光仲に目送り果て別れて宿所へ還りしが江三三廣光は越の岩神へ赴くとく准備

うくなりけるを義秀急ぎ禁めく且義邦を諫ていはく岩神へよりを報るハ
今さく火急の要支ありぶ只速ふせまほしハ和君が石戸の入部とこの地の繁華を
愛惜して又後ふ日をちくぶ再ふ測の禍あんかこれも亦知べくだかれが三二
標吉ふをわくもやく彼地へ退妃めへられも亦武詮昌之ふを遣して送らせんと
思へども嚮ふ和君の遠慮の如く隨後の家臣多妃寔ふ嫌忌の端あるを
よりく腰越獄六をめて彼地まで和君を送らせ更ふ亦石戸より越中へ遣さん
三二も亦渠ふ和とーく此度入部の俱をーく石戸より又越路ふ遣ハされ一事
両用と枉くこの議ふ後ひめへとのふ義邦沈吟ーく思ふ趣その理あり数の
まおくせばくんやとおもかくふも計せぬへと苔る鮮も詑られ折くく平太が荏柄の
宿所より義邦の迎とーく後者駆参つよー童扈従の告るふなん義邦ハ
遽しく義秀ふ別を告くそく俱ふ出くやく程ふ廣光と嗣忠ハ主の左右ふ

従ひつ又武詮と昌之ハ残る暑の程門前ふそを送りるふ程ふ義邦ハ荏柄の
宿所ふ立ちくく先亂長ふ對面しつ筐姫ふ云云と営中ふその首尾を告て旦光神
夫婦のもつ又藁二郎梭杖ぐもつ守戸浦太郎がるさへふ送るく具妃示され
筐姫ハ涙くくとやくふ悲しく辛やされ人の歎妃を分あぐ知る涙の雨の漏る袖も
顔ふ翳して泣のふあるとのよりハ亂長も彼処を退くー後ふくふ涙ぐさるの夏
ハれハ愀然として嗟嘆ふ堪ぬ直くく世を憤る恨くふ色ふ顕れくり且くく
義邦ハ貌を歛めく恭しく亂長ふくも對ひくこの月ろ浅くぶくー営待の
歓ひを具ふ述くくそいるやう某今ハ當地ふ要ありーもく武蔵へ赴くべーその
故ハ如此くくと義秀の意見の趣みづくくふあるーくふ箇様くくと具くあぐ亂長
頻しふ頷妃くくその議寔ふ理りと某宜くものせんくそ送ふ示ー今ーつくその日を
光仲夫婦のくくと又彼梭杖藁二郎ふが身後の忠義を嘆賞ーつく終日かくひ

くーけりかくくその詰旦亂長へ義邦を問注所へうかく有りて義邦石戸へ入
部のすを執權評定衆ゑ告ーゑび廣元善信らも安堵くその美ゝ既ゑ件の人ゑ
身の暇をゆひ折彼地へも下知せられう彼地へも安達が一族石戸左衛門の住
捨る古館のあるあれがそをそゑ俗ゑ多のめく幾足の寛急はその外の勝ゑ
なるべーとて御教書を遣ゐ与されるう これより義邦ハ日数を領所ゑ就んそ。
行装をいそぶ程ゑ辨速ゑ整ひぬさればゑ又亂長も義ゑ疎の。武士あんば
為ゑ費を厭ゑとゑく廣光嗣忠ゑ外ゑ自分の雑色奴隷をのそ暇供ゑを
立けゑ既ゑ出ゑけゑとゑ首途の日ゑ有りーゑび義秀はその曉ゑ城戸四郎
武詮水草太郎五冒之腰越獣六郎ゑをゑく走り来ゑ豫て約束のゑるあれば。
獣六郎ハ吉見夫婦を石戸の荘ゑで送りく後ゑ加の地より越中ゑる岩神へ赴け
て鞘繪の尼と判五ゑ贈る書状を遣ゐ与てゑ既ゑて義邦夫婦ハ亂長

義秀ゑ辞ー別れをゑ立出んとゑる程ゑ佐味些内高利も後れ走ゑ走り
来ゑく共ゑ餘波を惜ゑけりそゑ中ゑ武詮と冒之い斉一進ゑそ切く相模と武蔵ゑる州
堺迄ゑとく頻りゑ供を望ゑーーとも義邦ゑく禁めて許さぬ左ゑ就右ゑ就く
学京歓定ゑ云ゑ世を嘲ゑ郷ゑ武蔵野ゑ飾る錦ハゑ織ゑ初秋ゑ
衆人の袖ハ露ゑ朝出立萱姫ハ轎子ゑ乗ゑ出ゑ姫ハ苦ー別
路ゑく假柴の宿ゑ八声の鶏も鐘の音ゑ今朝ハ聞ゑ身ハ罪なくく
配流人の心地をとゑり果て立ゑ出ゑるを諫め奨ゑ壮士の泣ゑ哭くゑ弥ゑ
水雲萬里留別の涙ゑ餘りく辞ゑく立ゑ出ゑ友ゑ友の駒の足騒ゑ任
しそゑ心ハ送る胸の月真如の影を仰ゑ悔ーゑべー色ゑ朋友主従聚散
離合逝ゑく返ゑぬ別れゑ後ゑ出ゑ合ーゑ出れゑ又義秀ハ光仲義邦ゑ別れ
より鬱ゑとーて楽ーゑく和ゑ歌ゑ秋ゑ深ゑ暮ゑ宮中へ出仕ー て遠侍ゑ

ぶりを頼家卿い遊興ふ紛れく知らぬ世ふ絆ゆう多くふゆうそーろう義秀呼
とそ召さるく程ふまゆ知前ふまゆりーぶ泥うり近く待らせく物くうせくふ東
語次ふ宣ゆう火ふゆゆね義秀ハ東西南北到らぬ限なく諸國を遊歴せーまゆぶや
逆旅の苦楽ハ姑く措く深山大澤人ゆ記境或ハ遐鄙村落ふ鬼魅罔両のあう
らぶゆハ怪物ふ種見くそを退治せーすハゆ紀やそれ怪談ふ多く欲をとく一奴ふ
備へゆと亦他支も多く問あへば近習の輩うち合笑く仰寝ふ理りく毒蛇猛獸
夜叉天狗通力不測の変化ともを怕るゆ人ゆもあれを鷲を捕ふーうりけゆ
本事ゆりて想像れば遊歴中の怪談いくぐくもあんぞうんくくーたあけくよを
右ぶぐりふりそのうせども義秀これをばんうくくを且ーてゆうゆう御証でんいへ
ども妖怪変化いそのうるゆふく心ゆり致せのをうくハ狐狸の所為ゆて必らしげゆ
ゆゆゆ欲某諸國を巡りーー折妖怪ゆぐゆハーくびゆ憧見ーーとゆぶかれば悪鬼夜

叉の類怪むべく怕るべく画ゆ如ゆ記妖怪ハ世ふゆ記めまく出んといりせも果ぶ
頼家卿呵々と笑せゆひく義秀汝ハ武勇を特ーそ彼阮籍ゆ無鬼論ふ倣んと
欲ゆる欲悪鬼羅刹ハまぶ目ふゆうゆ。ども大孔神灵怪異のゆ世ふこれゆーとも
べくーぶ曝ふゆれ。和留平太亂長ゆく伊東崎ゆる山の洞の底を究めよとく遣
せーふ亂長ゆくーと数十里坂東道十町一十里ゆ大蛇を斬く帰ゆまつ又仁田四郎
忠常をゆて冨士の人坑を捜せーふ忠常従者と共ふ六人ゆく炬を秉て洞ふ
入り進ーゆくーと迫ゆーくゆのくぶく里ゆを覚えぶ時ふ蝙蝠群飛て面を撲
と頻りゆり既ゆーて前面ふ河ゆり。ゆくーく波高く漲りく渡るべくもあらぶりーを
従者ふゆ瀬踏ゆる程ふ四人ハ溺れて死ふゆり浩処ふ前途のゆくふ閃ゆ記陽炎
火光と共ふ残ゆる一箇の従者も忽地仆れて息絶くり忠常こゆふ躊躇て
前面を仆と見くーせば嬋娟ゆる一箇の神女彼首の水際ふ立在くり雪ゆり素記

朝夷六編巻五
頼家
月夜に
嫦娥と
のる
頼家

て身を抗く勇士速に帰去れ臭骸凡夫の汝曹足踏入る所にあらず遅々せば汝命を隕さんとく還らぬやと嚇るその辭いまだ訖らぬ逆浪倏忽張立て是首の岸に来んとせば勢ひ當たるべからず忠常は身に帯る短刀を取あげく河へ水入と投入れて。躯を踵を旋らしく辛して舊の路を辿るも恙なく洞より出くもり来る。既やて往還の時刻一晝夜を歴ることより。あれら神灵怪異の事忠常をもて證とせべしれども狂信を免れ孤が虚言といぐいなんこれより正しき証あり。その日甲夜の程なり疲れ連日の酒宴に疲倦し宿酒を醒さんとく。ぞうり高楼に登りて欄干に身を倚りけく吹入る風を待程に天中一朶の雲もなく月明に星稀なく狂鴉の杪を迎る声のみ遥に聞こえ六月中澣なる晝の猶照の天中も送りく天河原も涸ぬけん中伏ハ夜も過られども秋氣暢ぶ松に声あり時に西南のくに當たるく鬚髯る五色の雲天引降を見る程に天文忽地影向して地を離れて三丈許これに向ひ間近く立ち綾羅の袂ハ四下に耀き蘭奢の薫いとゆかしく天麗る容顔ハ亦人間にあらずとしもあらぬ花にもぬ月を欺く比人に月もなほ劣るに似たり。左右に両箇の女の童ぞ玉兎蟾蜍の翳を執りくるあも亦人の亂やねば玉面花容とのべ紀のみ登時天女の言の初音ゆも優に声立て云ぐ。ふまれに告て云く将軍驚き怪みあるに妾を月宮殿の嫦娥なり此度天帝救誕あり紫微月宮の両殿を造更せ玉足びて黄金の柱一本足らぬ頼家に徴やとて妾を降しあ入べ。かくのごとぐ宣ふを聞くに疑ふ事なかりしかば将軍ハ原天の列宿武曲星の再誕へ犯せる科のあるにより遂に人間に追降されく胎を母御に稟まり右幕府の家子と生れて既に二代の将軍なり今天下無為にして富を

四海を保つらゆるも憂苦煩悩なんぞ今ちうもも天帝の
あの勅命を幸れ件の柱をさく進せくかの愆を償ひぬぐ
年の遐壽を有ちく樂を竭せ脱履の後は天上の列宿と復なんと群仙の
みな羨む所只この功德に依るべしとのたまいく驚くこと前身果報さてそと
思へども輙く所行のあざれ沈吟ずる頭を擡くに王帝のおさせぬ
蛟黄金の柱の脩短いかをなるめを欲しめぞ教えぬと問を天女答ぬ
長さ二丈五尺なるべく遇さもこれを称べしと示はいまく心の當感黄金を
國の至宝なる威勢をめぐるも沈の柱のいつ中を輙く造り出さるべき財用足らば
ぜん術中と推辞へ天女は怒を含く心蓬しに頼家卿日本摠追補使として四海の
富はその身に聚へりよりも宝庫に物足らぬも民に仰せて借りぬぐ件の柱を
幾本とも日数を造り出さんと飛騨の深山に杣木樵る樵檜より易なるべし。

惑ひをとりて難儀せしれば天帝へ遣教の罪冥罰顕面なるのをかて未来永
劫大斎をその身をおきんくてさよみづく深念を思へりと諭せ永海て固辞の由を
逆天の罰恐れても惶々に餘りありとて交ばもこもして進らべし。
何の日どれの方へ出べきと問へば天女は領ぬく約せることを今ありて吉の間に柱を
作るく彼処の杣に荷せぬ奏はけぶり七日に當るその夜三通の比ぬくしと来さ受
もて升りて天帝へ申し身の功德を奏せべ然して漫は天意を漏くべ勞してかぐく
崇あらん努秘めぬと期を推して天女は雲に立紛れつ彼女童共侶かぬ見えぬ
ありあり當下れば忙然と其方の空を目送るのみ夢とあへい夢にあらぬ現とも
思へ絶く述べ扨べなおざれば猛き事に假托く黄金を裏る柱を造る
百ゆ中てもの工卒とりかくるも約束の霄にあり一夜作り磨ぬ黄金の柱を
彼高楼の下なる庭の杣に荷うけさせく近習のれを遠離つれ只ぬり庭に

出さく香を焼き心を澄し愛敬を天を俟程に果して天文影向して彼拝伏つゝ、歡びの声音も如に賞賛して待軍今この功徳より絳天帝に奏し玉ふ壽福ハ天人の隨ひ奉べく海内ひとく泰平ならん思慮を政支に費さとく寒暖の別なく樂しを極めへと慰めくをめて招けバ奇ありう形件の柱そたのゝ方ら松の梢を離るゝ出ぞ示内め出登ところ程に左右に従ふ女の童に本末ゆゝ受とあくそぶ侍有ふうものまれば累り包む白雲に體ハうんとゝ西南のくふ飛ばく失せけゝこの夜露ばくれども予が目撃せし所やく誰とそ知らぬのもか抑神霊奇異のゆゝ如ゝり正に證あらんさぞむ汝ハ江湖上に神異もあく妖怪もあるといふ汝ハつゝとゝ舞ばとしく詰りめへ義秀ハ泉し果て玉ふ天妃息を吻ち竹取字津保の物の本捜神異苑の小説に豫てもうたることゝ今の世にて為る奇驗ハ沒くに新奇とまゝたゝ。とハいつ比のさゝりけんと問ゝ

傍ちに人ゝれハ近習の輩侍へくく遠くもあゝ。ものゝ果く又ハ十日に及ぶのこと。ゝ義秀領ばく貌に歓め恭しく御座に對ひて額をつ伏基間恒寡間に端坐玉ふ真の妖怪ゝゝとまゝあゝを諭さ玉ふ天女の一奇異耳新しゝを疑ひ玉ふに有ゝ人も心に安ゝ思ゝ不忠なゝ。彼唐山なる道家の書に紫微玉城の説ある人を魅ゝを寓言ゝり天人虚中に空ゝ月陽徳ゝく形状ゝ一壁ハ神の像ゝ人も祭ゝ礼ゝ在ゝとゝ玉ふ如ゝ。ゝ天上も亦人間に異ゝ宮殿楼閣あゝ。ゝ宮殿ゝ誣く宮殿ゝ。ゝ辰巳海市の類中に真の宮殿ゝ。ゝ玉ふ不傾ゝ修復ゝとゝ工作を奥さんとゝ以ゝ。ゝ列仙七女の。ゝもの有無難ゝ知ゝ。ゝ。ゝ意に慕ゝく至尊ゝ。ゝ敬の罪を釀ゝ玉ふ。ゝ。ゝ一旦ゝ身の暇を。ゝ。ゝ天女の往方を沛獵ゝ。ゝ。ゝ真偽を其必ゝ。ゝ。ゝ是其ゝ願ゝ。ゝ。ゝ家卿。

忽地蟲と示らるゝやうなれ。義秀汝らを侮りて孤貉を魅うされ虚けたるものと
思ひ給ふ。こゝに汝が不長が河源を究めく織女が造けん彼張
騫が倣ひとも今迄天文の往方を索ぬ。真偽を知らんを願ふと所狂人が異
なる。寔に寔に浅ましの限りこゝ有れども。その身の願ひを許さゞるが惑へる欺惑さり
し狡ぬさゞ見くるに天文の有無を諦て懲りて事なかりしに十日を限りて
汝れ身の暇を乞はん知あらば天文が升りて正しき徴を取て事よるを空しくして立
ちらばその度は決して免さゞるとく退りて升天の准備をせよと敦圉の出氣色の
平なるに如不近豆の如く面に汗握りて求めを自滅を招不
庶し無益の論議が物を推せ博士ところのうくそさまとぞ思ひのうりんを
かせられども義秀が此言受して営中を退出つ躯て宿所が還りて
なほ思ひ又よりあれば父母も兄弟も定め吉凶某けの営中へ伺候してひ
伊豆山の裾野が出く追鳥狩をせもとある台命を稟り紀よく走りて賞なる
騒兵十名ばかり借しこの野猪麋鹿があん時列卒の准備がといふ義盛
あるは紀十人ばかりの五六人倍まゞしと家隷召く立地が辯云云と分れば
義秀が退紀く城戸四郎武詮と水草太郎五昌之を法とり近く召びすとけ
営中ゆくあり一趣天女影向の一ト條を其紀が一く文いふうれがまこを必妖
術ある山伏あるゝ盗賊の所行あんず疑ひあり如此々と請おこ
されば郊外の山野を渉獵く彼癖者の在処を索が臆度の外を出て
唾して生捕るべしかくその方位を攻るが天女の進退一度あるを西南のを投て
裾去いたりとあれば足拇狡貌姑挙あるを決と天城の山中かんれ先
天城の〻をたづねて遣ぎ足拇を渉獵るべし汝達よくこのあるを沒く物が
遣ば死力を盡せよあれども癖者ゴあるを入るあるを秘よ外を洩らしそと示

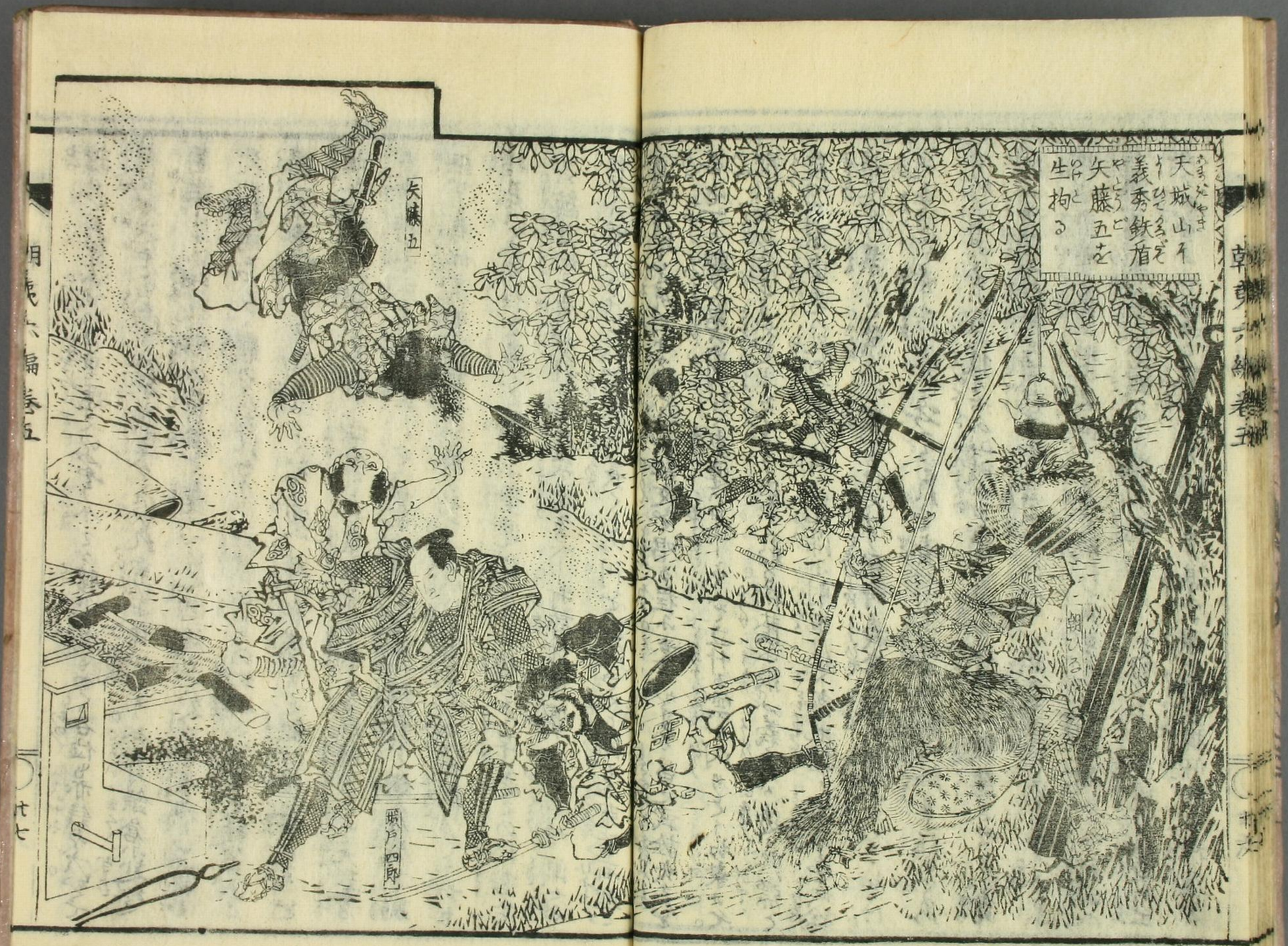
せば武詮昌之いかゝ為果てゞ退散るかくてその日八果敢く暮てゝゞ暁ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ義秀八獵装束して頭ハ一蓋の綾藺笠を戴き背ハ二十四挿こる獵
箭を笞高ハ負ひて腰ハ倶利迦羅の短刀と半弓を左右ハ横佩ゝゝ鐵撮
棒を突立くゝゝと馬ハ来らぎりゝゝ左右ハ従ハ両箇の郎黨武詮と昌之
腕甲脚絆ハ身を固めく各器械を引提てりこの他十六名の駿兵五人の奴隷
主従總ゝ廿四人その夜八貌姑峰の山中ゝ長ゞ嵩所ハ暁を狩りこの地方八
後ハゝく遠記ゝゝより洗獵人とく又暁ゝゝハ立立く只管路をいそぐ程ハ第
三日の午時ハ天城の山ハゝけ八ゝと十五六里（坂東道六町一里）ゆゝ及ひる抑伊豆州那
賀郡天城山と云ふ八麓より麓ハゝ行程大約三十六里（坂東道ゝ三十六町一里ゆくれハ六里）
人烟絶くあることく羊腸ゝ山又山岩滑ハ路細く一夫関を成ゝゝ記八千軍
萬馬も進ぐしゝゝ蜀の桟道ハ似ゝゝべし。青葱ゝ常盤木八弥ゝうゝハ
枝をまゝへく熟形の日影も漏ゝ蔓延ゝ藤葛蘿八岩より岩ハ寅縁て
造化の網を張れゝゝ如く向上れバ千丈の青壁刀りく削るかと怪あれ直下ゝ
百尋の碧潭鑿りて穿てゝゝと驚ゝ波樹上ハ聚ハ山蛭ハ旅客の足音を聞て
落蒐ゝと搔拂ハども飽ゝれぬれぎ叢蔭ハ臥ゝ牡鹿ハ炭焼く煙ハ駭起く
人逐されども走らぎれバ已ゝ鳥ハ樹隱れく高音ハ頭れ雲ハ峯ハ帶ゝく
風の色ハ解ゝ山静ゝて太古ハ然ゝり日長ゝて歳年ハ異ゝ誰ゝ淺水ハ
盃を濯記く流ゝを尋ゝ畸ゝ遊仙の窟を訪ふく還ゝゝを忘れゝ
奇巖怪石攀れども陟ゝぐく鳥路熊径進めども到り易ゝ寔ハ
是塵外の住境ハ遊ぶ今半日の逃栖ハ彼七秦の民ゝ漢とゝ
晉と遷ゝゝその世を考ゝ知ゝ似ゝゝ程ハ義秀ハ主従草を
折布て腰兵粮をうちゝ記食果く立んとゝゝと死忽地南の方を隔く

鑿の音丁々と谺ふ響き渡るに義秀耳を欹て武詮に問ふ歟
昌之いかゞやと問れて斉一小頭を傾け現山樵が枯木伐る斧の音聞ゆ
石工が石を鑽る鑿の音あやあらんといへば義秀頭を掉さく否木
あらじ石ふあらじ彼ハ正しく鑿の音ゝ衆皆績けと逸足進めく件の音を
おろ當ふ西ほ山深くこゝ人ると既ゆらく十町あまり或ハ葛ふ攜さく登り
或ハ岩を伝ふくぐり辛して近つ紀く樹枝の間より覗ふ果して前面の嶮の
ほとりふさゆる形る穂屋を作りく癖者まべく五六人四下も糴く黄金の柱を
鑿りて剪碎くを鞴ふうけく焼爛もとゝ半ばを過うるを中ふ尺一人
頭ゝもたる癖者ありそハ義秀が岩神ふく鑿漏しる賊の戎禦鐵盾
矢藤五重連し原来彼奴ら幻術ゆて天女とゝ在く上を欺紀騙暑りたる
黄金の柱を焼るもく售んとまりかゝるべしとハ豫てより忍ひしとまるも

合笑く後方ふ立るる武詮と昌之を招紀ませく辨如此そと其けバ二人を
斉一あるゆく又駁五ふふ其紀つ武詮ハそが中ふ十人を従へく路ふ紀往を
辿かくも穂屋の背ふ達り出るを彼首ふ寄るものあるまり當下義秀ハつ紀
立まする鐵撮棒を昌之ふ遞与ゆそ謀し合せしるれバ昌之ふく進こまりて
そが後取て突立るふ渠も夏力の壮佼ゆゝ腕ふ稱ふべくもあらねバ只曳揚りて
駁兵ふゞ先ふ立つ樹間より頭れ出る程しもあらじ武詮も亦穂屋の蔭より
駁兵を進め走出く雙方齊一吶と揚るる声ふ駭く山賊ふハ吐嗟とぞうり
えうゝれがたゆ近つ紀る太郎五昌之ふふくして面をゆせじ鐵撮棒を紀
めて平て四下ふ響く声高ゆふれ賊鐵盾重連暴義ふ岩神ふく
命を貸るこの義秀を忘れハせじ天羅の中ふあるゆく汝が首ハ汝が物ふあ
ずとあくゞ邪術をめて上を瞞し騙り幾千貫の黄金の柱を騙暑りゆに

驟れく鞴ふりけく焼くるも竊ふ售んと伎倆るらいハ天眼通もてこれをく
知れりよりて追捕の仰せを禀くかう多勢をもて捕篭されば左慈張角が
術ありとも一歩も遁るる路なく とくるを来ひく郷の索を受よと呼れば武詮も
亦声あり立く陸奥の戦ひふ涉るものありとも荒れる城戸四郎武詮この隊ふ
在り其処ふ退たそと罵りく蒐地ふ嘯く蒐れ出いよ〳〵騒ぐを下の山戦
脱れんとやもひ乞巨刀をふり引抜たくあはせ立ずと斫掃ひをいくもと
武詮昌之駆兵を進めく些も擬議せず或い組伏せ衝倒し一箇も漏う
さも舞々と索をひそで牽立るその間ふ昌之い武詮と共倡ふ重連同ふて
左右より撃漏さじと進ぬりる程ふ重連い要時を下の山賊を撲りふ
罵り励して防ぎ戦んとせし甲斐もなく皆彼此ゆく生捕られ残るそその身
一箇ふりぬ呪く水草昌之を朝夷さとをくけるふ。武詮と左右より間

近くよりを尻目ふけく口ふ秘文を唱る程ふ走りかゝる昌之武詮矢声を
合て丁と撃ち寇い剪れく重連い足下ゆ立升る雲ふ閃りとうち来りて
脱れ去らんとする処を半支をうるく形る樹蔭ふ張ふ義秀が透さず弾と
裝つ箭ふ重連い乳の下より背へ箆深ふ射串れく忽地撲と滾落るを武詮
昌之をう累りく緊しく索をけてけり登時義秀い程ふ石ふ尻をうちけ。
先重連を牽居さをてみづからこれを責河ふ既ふ各所の深ふ弱りてあ
いのべくもあるぎれば又彼ふ下の山賊ふさべく五名を推並べく鞭懲さをてく責
問へば苦痛ふ泣堪ず首伏せる中ふ某ふいこの山中ふ年来住ふあどもあり分る
鐵眉重連い曩ふ越の岩神より遠く脱れて只ひとりこの山を踰んとせ折某ふ
相識ざれば剥器んとて戦ひふ勝ふ絶こありけをかりしば重連いその身の出
処と術あるを云云と説示くるふあり某ふい渠を頭と推仰ぎく徳屋を


天城山ヲ
義秀鉄盾
矢藤五を
生拘る
矢藤五
城戸ノ四郎

譲りのくせひ水次の日重連又いつの事ぞ今こそ腰おれ物もかく各位も赤銭あるべかりて
月日を送るこそ思ひ出るもあるべからざるもあるべからざるもあれ幸ひふ奇術あり今宵鎌倉ふ到れ
箇様々ふ行ひ賜の黄金を獲つべしと酒煖めて勧めるを等ねといふ欲と
思へば掻消ものとく體のうんえびあり〜ふ某ふいその幻術ふ心服と疑ふべいと
憑〜くやふ程ふその夜ふ空しく過り果つ絳をや成りと歓び告て七日ばかりを
過つくめくびく雲ふうも来て鎌倉へとて蜚去りしふ果てその暁くふいと大なる
黄金の柱を空中より滾隊千てその身も雲を下辛つ絳云云鎌倉殿を騙
課せ〜為体その胥の首尾を報るあぞ某ふい呆るまでふみふ欲ばてうもも
惜ばなく柱を售んと請ふ重連頭をうも掉ふて早てこの侭售んと
ばく絳立地ふ裴覚れくその出来速ふべ〜打砕て焼爛して此計ふ断々ふ
售へば買ふもこれを疑ふ長くその利をはつべきと諭ふ衆皆有理と

応さく鞠蹴を求るふ悲ふもあるとかれば北條まで赴くやうやくきて
これを得るこれらの所為ふ日を費して焼初めもつく日もあるふ孫ばその訣
だゆもまぐ物售へ捕られ絳と哪言がるしく陳じ義秀はて武詮ふ
徳屋を展換さるふ旅装笠かんとおもふの蔵や術書三巻あり義秀
取て初めき見るふこれ紛べくもあるの陸奥ゆく重連が逐電せ〜時竊取ふ
経任が妖書と第一巻ハ飛行の術第二巻ハ火磔を発し十曳の石をも徙るの術
第三巻ハ風を喚び雲霧を起して術を載くこれ皆隠語ゆて速ふ読易ふ
れば義秀ハよくもんぞあるも残黨穿鑿のふかりあるべ〜ふ欲とそ
巻くそ俗ふ懐人交ゆそりその智その勇みの圖ふ當りし義秀がけの進止神
出鬼没の良策かれば武詮昌之ふ深く感じて左右ふとく進ふ某ふ不才ゆて
ふろふ紀一美ありもの越の巫石神ゆも重連ハ幻術をも君ふ奏れなその棒れ

當りたと笑ふ中に改間も遠く渠を要ふるも乗て飛去るんとする也君ぞ一箭に射て落されいつる所以ぞおんむんと問へば義秀微笑く虚実は心つぶれぞその疑ひを理りなる術者の邪正は彼を受るの虚なると然ふその術を応験の壁を盾を徹す前も幕に障れば落るが如し岩神まことに盃て重連を撃んとせば還て彼奴を走らしむる是同じこの理なるべし昌之の色を生て且認られる棒を以て躱れ躱れば躱るれば重連は昌之を義秀と思ひ故撃んと欲る昌之ホが棒も彼身に當りたる脱れ去らんとはすれども及び渠又外に敵あるを知らざるこの虚を乗て殺わる義秀が箭は不意まぐく岩神の棒と同じくしてその邪曖を射て落さしむるの要を示す武註昌之は敵を撫れる如要ふるに感服おくる多里竟義秀重連ホを生捕て又甚だ多く話説るもそれ亦復編を續く解分るをまつ知んん。

朝夷巡嶋記金傳第六編巻之五終

附くるの書第七編の巻々を繙ふ至るべ先天城山の條の送れ少きをべく。然して後の義秀乃ち再び陸奥へ赴き頼家修善寺の浴室中に刺せるの事又朝夷切通の權輿三浦の矢部の不動和田合戦の濫觴義盛軍議の時に方て人の視聴を避んるの大磯の長の妓院に親戚朋黨ホ同意の武士を聚會て和田酒宴と唱ふるの中に叔建保の和田合戦終に敗軍に及べば義秀その徒二百餘人と共に船に乗て大洋に泛めく危窮を脱る事を終べ。その間義邦夫婦父子主従一期の且見姫主従并に田鶴媛鞆繪尼判五一三浦太郎ホが事盡んとしくい又起る嶋めぐりの條に至て第七編の後に出んん八百日もく濱の真砂拾又の壷の碑るを以てそ。

と書肆は急げど早に書も盡しく看官後をんまく待せごとに早に

とぶる長物語をいくばくん異日の送に忘れ備んとく。その提要を記そのく。

此のごとくの坊賈の利を捷まとる素よりその所とするも猶甚しかれあり拙著常世物語三國一夜物語の二書のごとき文化丙寅の燬ふ係りてその刻板一ども烏有となり一ハ過半亡びうせ一ハ賈豎豆襄ふ常世物語の足らざるを翻刻又一夜物語を翻刻せと雖るあれらのようを予ハ告ぜまゐく校正をこゝろとハ

ゝるなり就中常世の一書ハ恣ふ書名を改め更て且出像も假名の書ざるもちのぶまふきふせばるとゝるれが悔字脱文假名違ゑど枚挙るふ遑もあらぜ予ぞめこれを知らぎ今茲相識の一書肆が常世の板を購得うとき校正をこゝろと及びう。

ゝ知らてうち驚ゑ歎めれば件の二書ハまぐく舊板と違るとゝろを予ハ又くく予が面目はあらばるれ少らぎ頃ゑ九年前の戯墨るを今ちら懸念ぜくも

ゆゝ孫どコヲが名を賣らるとあをちゆを聊そのようを書法くるふるん。

丙戌長月朝夷巡嶋記第六編の後ゑ贅しく。作者ゆゝび識

拙舗累年書籍ヲ鬻キ近來都鄙一般書房ト弘通ス且ツ諸府縣廳或ハ諸先生ノ御藏版アル毎ニ幾兌ヲ命セラル故ニ新板圖書ハ積テ以テ洩スコトナシ加フルニ和漢洋ノ書冊ハ今古ヲ不論亦以テ備ヘ置ケリ仰冀ハ書ヲ購フノ君子其多寡ニ嫌ナク弊店ニ就テ御買得アランコヲ

文榮閣主人謹白

製本處

前川源七郎

大坂府下心齋橋筋北久寶寺町廿九番地

早稲田大学図書館
011888007450